

一番茶「1芯2葉」新芽の摘採最適時期			
<p>[要約] 一番茶における「1芯2葉」新芽の摘採最適時期は、全窒素・遊離アミノ酸含有率が一時的に高まる時期で、芽重型茶園では新芽の平均開葉数が3葉前後、芽数型茶園では2.5葉を過ぎた頃で、芽数型茶園の方がやや早く短期間である。</p>			
農業総合センター・茶業指導所・茶振興担当		「実施期間」 平成16年度	
[部会] 農産	[分野] 高品質化技術	[予算区分] 県単	[成果分類] 指導

[背景・ねらい]

極上の品質が必要とされる各種茶品評会への出品茶などにおいては、一番茶新芽の先端部分のみを手で摘み採る、いわゆる「1芯2葉」摘みが行われる(図1)。

「1芯2葉」摘みの摘採適期は開葉数を達観で判定して行われているが、茶園の状態(樹勢)などに応じた明確な基準はなく、「1芯2葉」新芽を対象にした調査研究例もない。

そこで、「1芯2葉」新芽の生育・品質特性を調査し、摘採最適時期を判定するための基礎資料とする。

[成果の内容・特徴]

「1芯2葉」新芽の乾物収量は、芽重型・芽数型茶園いずれにおいても、平均開葉数が2.5~3.5葉の間は変化が小さく、ほぼ一定である(図2)。

「1芯2葉」新芽中の全窒素・遊離アミノ酸含有率は、一時的に高まった後急激に低下する。この一時的に高まる時期が品質面からみた摘採最適時期で、芽重型茶園では平均開葉数が3葉前後、芽数型茶園では2.5葉を過ぎた頃となり、芽数型茶園の方がやや早期の摘採が必要となる(図3)。

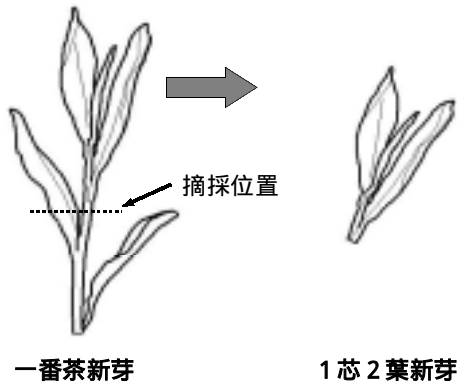
摘採最適時期に該当する期間は、芽重型茶園では比較的長い、芽数型茶園では非常に短い(図4)。

[成果の活用面・留意点]

芽重型茶園は前年度に中切り更新を行った茶園や幼木園、自然仕立て園など一番茶母枝の充実した茶園、芽数型茶園はその他の弧状仕立て園が該当する。

達観によって開葉数を判定すると、実際の平均開葉数より1葉程度多くなる。従って達観による場合は、芽重型茶園で4葉弱、芽数型茶園で3.5葉の時期を摘採最適時期と判断する。

[具体的なデータ]



一番茶新芽 1芯2葉新芽
図1 「1芯2葉」新芽の摘採方法

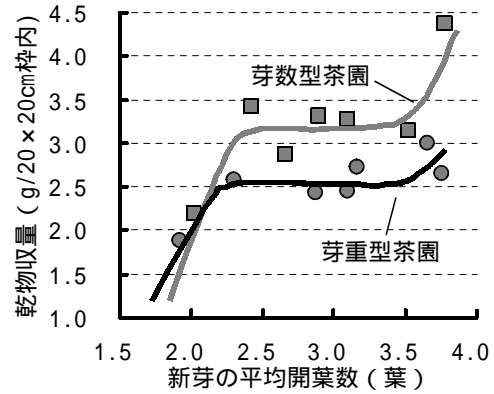


図2 新芽の平均開葉数と「1芯2葉」新芽の乾物収量

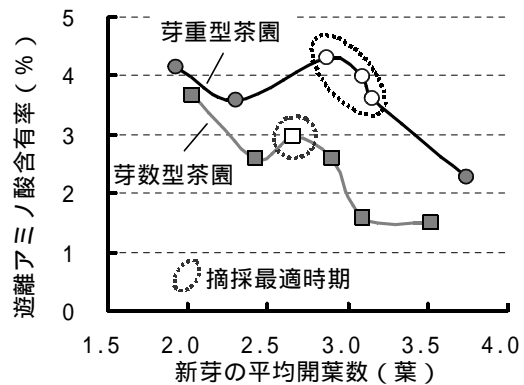
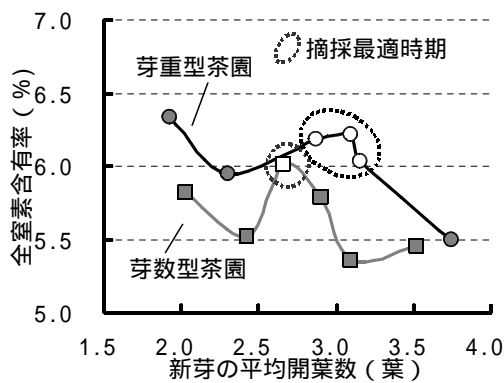


図3 新芽の平均開葉数と「1芯2葉」新芽中全窒素および遊離アミノ酸含有率

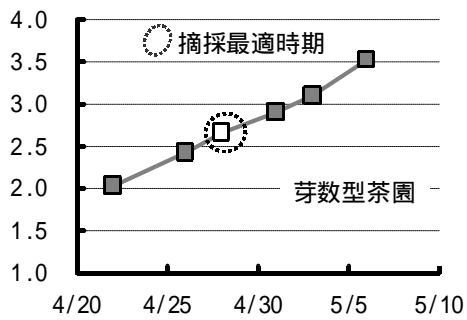
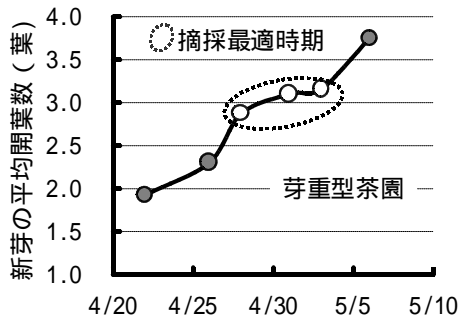


図4 新芽の平均開葉数の変化

[その他]

・ 研究課題名

大課題名：消費者等の多様なニーズに応える高品質・高付加価値化技術の開発

中課題名：安全・安心・高品質な農畜産物の生産

・ 研究担当者

忠谷浩司 (H16)

・ その他特記事項